

古代世界におけるジュエリーの発展史：本論

一、メソポタミアと近東

貴金属と宝石を素材とする今日的な意味でのジュエリーが古代近東で本格的に製作され着用されるのは、青銅器時代（紀元前 4000 年頃）以降である。青銅すなわちブロンズは融点の低い錫（摂氏 232 度）と高い銅（摂氏 1083 度）を一定の割合で溶融させて得られる合金であり、かなり進んだ冶金の技術とノウハウの蓄積を要するという点において科学文明の萌芽を画す素材と言える。その利点は、融点が銅よりも低く鑄造が容易にもかかわらず、硬度が高く耐久性にも勝るといいう性質にある。鉄が登場するまでは武器や道具用として極めて有用な金属であったのみならず、その深みのある美しさからジュエリー素材としても多用された。この青銅器時代は人類史上初めてメソポタミアにおいて開闢するが、銅より融点の低いゴールド（摂氏 1063 度）は、すでにそれほど加工困難なものではなくなっていた。しかし、メソポタミアおよびイランでは産地が比較的少なく不均等に分散していたため、ブロンズ製のジュエリーに代わってゴールド・ジュエリーが本格的に製作され着用されるようになるのは、紀元前 3400 年頃以降と考えられている。

ゴールドは、貝殻や真珠、珊瑚といった生物由来の宝石を別とすれば、最も古い原初の時代から人類が手にすることのできたジュエリー素材であったとも言える。なぜなら、ゴールドは鉱脈が存在する地域の河川において砂金やナゲット（結晶化した金塊）などの自然金（12）として採取されるからである。そうした自然金は自ずと純度が高く、したがってそのままの状態ゴールドのすべての美点、美しい色と輝き、耐久性（錆びず、腐食せず）、優れた加工性（柔軟性、展延性）を具えている。実際に青銅器時代のほぼ全期間、河床から採取される自然金が精錬されることなく使用されたため、この時代のゴールドの発掘品は純度の違いから色がまちまちである。厳密な精錬技術が開発される以前には、ゴールドの色だけが経済および技術上の優位性の判断にすらなっていた。

ゴールドスミシング、すなわち金工技術には大きく分けて鍛金と彫金、そして鑄金という 3 つのカテゴリがある。おそらく最も原初的な技術は鍛金と考えられるが、それは河床から採取される砂金やナゲットの自然金は比較的純度が高くゴールド特有の加工性の良さを具えており、ハンマーで叩くことによって圧延加工（鍛金）したり圧着させたりすることも可能であったからである。道具は銅か青銅製のものに頼っていたため、最も単純なハンマリングとピアッシング（孔開けに）加えて、ある程度進んだゴールドスミスの技術が登場するのは紀元前 2000 年代に入って以降のことと考えられている。もちろんゴールドより硬い青銅や鉄の道具を使って、表面に装飾モチーフを押し彫り（チェイシング）あるいは削り彫り（イングレイヴィング）する（彫金）ことも難しいことではなかった。熔解させたゴールドを鑄型に流し込んで、立体像などを得る技術（鑄金）も徐々に高度な段階へと進む。エレクトラム（13）と呼ばれる色が非常に淡いゴールドは銀を約 25 パーセン

ト含む自然合金だが、冶金技術が発達して高品位のゴールドを扱う段階に入ると、融点の低いロウ材として使われるようになった。

1. 青銅器時代：紀元前 1000 年以前

(a) 紀元前 2000 年以前

3000 年紀前半のメソポタミアのジュエリーは極めて少ないが、たとえばウル出土の発掘品は、柔らかい石や動物由来といったより初期の段階の素材により硬度の高い石が加わったことを裏付けている。その中で最も人気の高い 2 つがラピスラズリとコーネリアン (14) で、初期王朝 (紀元前 c.2900-c.2340) 時代のジュエリーにはこの 2 つの宝石が相互にまたゴールドとのマッチした組み合わせで見られる。コーネリアンの硬度は比較的高いが、ラピスラズリとターコイズはともかなり低く、単純なフリント (火打石) や黒曜石の道具で成型や孔開けが可能であった。典型的なシュメリアン・ビーズのひとつであるバイコーン (2 つの円錐を底面で繋いだ形状) (15) は、ゴールドやコーネリアンにも見られるが、ラピスラズリにおいて最も特徴的なものとなっているのはラピスラズリがその加工にぴったりの硬度を具えるとともに、方向性の破面がなくこの形状の量産に向いていたからである。ウルを始めとする各地の遺跡において様々な製造過程を示す未完成のビーズが出てくるが、それらは巨大なビーズ製造産業が存在していたことを窺わせる証拠である。

ゴールドのパーツのフォルムにはラピスラズリのビーズとしてポピュラーであったバイコニカル・シェイプ (バイコーン) を模したものもあるが、逆にまずゴールド用として開発されたもの、たとえばゴールド・ワイヤーによるスパイラルのペンダントを模したラピスラズリのスパイラル・コーン・ペンダントもあった。

紀元前 3000 年紀におけるゴールドスミスたちの仕事に対するほぼすべての証拠は、アナトリアとメソポタミアから出てくる。たとえばウルのロイヤル・セメトリー (王家の墓地) からのものである。古代世界のほとんどのものと同様に、それらのゴールド・ジュエリーは、キャストよりはシート・ゴールドから作られたものが大勢を占めている。

ウルの遺跡から発見された紀元前 2500 年頃のゴールド製のヘルメット (イラク国立博物館蔵) (16) が最も有名だが、ウルの遺構自体の発見が 1922 年と比較的新しく、まだまだ未知の部分が多い。そのヘルメットは、1 枚のシート・ゴールドを裏側から打ち出すプセと表から施すチェイシングおよびハンマリングの技術によって成型したもので、ロウ付けは行われていない。もちろん、ロウ付けの技法を知らなかったわけではなくキャストの技術にも通じていたが、メソポタミアのゴールドスミスはシート・ゴールドのカットとハンマリングの方を好んだということである。

ハンマリングによるか細いゴールドの帯を擦って作られるゴールド・ワイヤーは、ループおよびその他の連結パーツから成るチェーン用として使用された。ウルからの出土品にはループ・イン・ループ・タイプ (17) の厳密な意味での最初期の実例となるゴールド・

チェーンとして知られるものがいくつかあり、同じくクロワゾネ象嵌（帯金取巻き）による装飾的なリングの見事な初期の実例も発掘されている。ループ・イン・ループ・タイプのチェーンの製作にはロウ付けが必要となることは言うまでもない。またメソポタミアとアナトリア双方から出土したシルバーやゴールドのオープンワークによるディスク・ペンダントは、精密なロウ付けとアセンブリングの目覚ましい実例となっている。アプライド・フィリグリー（ゴールドのベースにカットしたゴールド・ワイヤーをロウ付けして装飾パターンを施したもの）もすでに存在し、フルーティング（縦溝装飾）を施した中空の半球をロウ付けしたメロン・ビーズ（18）といった高度な技術も彼らはすでに具えていた。

（b）紀元前 2000- 1000 年

無数の独立した微小なコンポーネントの正確な取り扱いとアセンブリングに必要とされる技能の進化は、紀元前 2000 年頃に初めてポピュラーとなるグラニューレションにおいて頂点に達した。そのデザインは、多くが直径 0.5 ミリ以下という微細なゴールドの球体によるラインやパターンによって構成されている。この時代のゴールドワークの多くに共通のよりプリミティヴな外見と言えるもの、たとえばトロイから発掘されたものなどはデザインの不規則性もあって、起伏のある滑らかな表面のゴールドについてよりもフィリグリーやグラニューレションにおいてより容易に見分けることができる。

グラニューレションの技術は急速に近東全域に広がり、紀元前 2000 年紀初期までには洗練の極地に達する。各地の遺跡からの出土品のジュエリーに施されたグラニューレションによる装飾のフォルムと正確さは、この時代の特徴であるシンメトリーと規則性への愛を強調するものである。

これらの装飾デザインと技術、そしてフルーティングを施したメロン・ビーズなど共通のフォルムは、近東のほぼ全域にわたるジュエリーのフォルムと技術の広範な均一化を示すものである。

交易による各文明および民族間の影響とは、相互的であるからこそ均一化へと向かう。たとえばカナーン地方で出土したその他のアイテム、シストラム（古代エジプトのがらに似た楽器）（19）は両脇に座した猫を伴うエジプトの新王朝のスタイルと構成に典型的なものだが、このタイプは同じくキプロス島出土のものもよく知られている。さらにこの時代のエジプトの影響は、ゴールドの蠅のアミュレットとエジプトの女神ハトホル（ホルスの母、愛と幸運の女神）（20）の頭像を伴うシート・ゴールドのペンダントにおいていっそう明らかである。

エジプトの影響はシリンダー・シールの表面デザインにも見られるが、それらは主にシリアの沿岸で作られたものと思われる。また使用されているアメシストにもエジプトの影響が窺えるのは、その宝石自体がエジプトから輸入された可能性があるからである。カナーンで発見されたカバを表したエジブシャン・タイプのアミュレット（身に着ける護符）は、そうしたアメシストによる実例のひとつである。

リングは近東を代表するジュエリーではなかった。普遍的に存在したシリンダー・シールは、シグネットとして実用的なリングにセットするにはどう見ても使い勝手が悪すぎる。しかし、エジプトのスカラベ・シールは、リングのセッティングに対して理想的なものであった(21)。したがって、リングの出土品はエジプト起源のものかそのインスピレーションを受けたものであった。スカラベ・リング自体は、紀元前 1500 年以降にレヴァント地方においてかなり一般的なものとなった。とは言うものの、青銅器時代から伝存する近東のリングは実用的なシグネットよりは、装飾や厄除け的な目的のものであった。

ところで、シールとは近東で発明され発展した一種の印章だが、押し付けたクレイ(粘土)の表面に絵柄がレリーフとして残るよう石などの硬い素材に絵柄を彫り込んだものである。適法な取引の証明として所有権を記すために用いられたが、アミュレットやチャーム(幸運のお守り)としても愛用された。スタンプ型のシールは、すでに先史時代(紀元前 3400 年以前)からの存在が確認されている。初期のものは紐を通して首に掛けるように孔を開けた単純な形状のペンダント型で、彫りも立体的なインタリオ(陰刻)ではなく線刻であった。やがてスタンプ面の彫り込みはインタリオへと進化してゆき、裏側に相当する上の部分も動物などの立体彫刻として細工が凝らされるようになるが、それらのシンボリズムはアミュレットとしての意味合いを深めたものであることが判る。素材としては硬度の低い石、ステアタイト(凍石)やタルク(滑石)、サーパンタイン(蛇紋石)、マーブル、チャートなどが用いられた。

シリンダー型シールは紀元前 3500 年頃の半ばにイラク南部で登場するが、紀元前 2000 年代に入るとスタンプ型シールを駆逐してしまう。これは小型のシリンダーの外側に一連の図像を切れ目なくインタリオ状に彫り込んだもので、クレイの表面に転がしてシールするとその図像をフリーズ状のレリーフとして残すことができる。スタンプ型に取って代わったのはその図像が含む情報量が格段に多かったからであり、メソポタミアおよび中東が鉄器時代に入ってもなお主流のシールであり続けた。

このように中東におけるシールはインタリオが圧倒的に多く、カメオのものはヘレニズム時代に入るまでほとんど製作されなかった。紀元前 2000 年以降レヴァント地方においてスカラベが主要なシールの形式となるが、シールとして使われた図像はスカラベを象ったカメオではなく裏側に施されたインタリオであった。

(c) 紀元前 1000 年以降

メソポタミアの鉄器時代の始まりとされる紀元前 1400 年頃には、融点が 1539 度と格段に高い鉄を扱うまでに冶金技術は発達した。

紀元前 1000 年以降のゴールド・ジュエリーは、宝石をセットしたものではないことが多い。また一方で、この時代には特にビーズ用として色付ガラスの使用が増大するが、ガラスをセットしたジュエリーは稀である。

紀元前 1000 年初期以降の男性によるイヤリングの着用は、ローマの著述家たちによって記述された近東の特徴でもある。紀元前 9 世紀から 7 世紀のアッシリアのレリーフは主に男性または神々のもので豊富なジュエリーの着用を示しており、ブレスレットやアームレット、イヤリング、ネックレスが含まれる。この時代のアッシリアのゴールドワークはほとんど残されていないが、レリーフに描かれたものと似通ったものと思われる。多くが精巧に作られており、微細かつ厳密なグラニューレションの高い品質はこれより早い時代の近東では見られないものである。アニマル・ヘッドを伴うアームレットおよびブレスレット (22) はアッシリアのレリーフに描かれている最もポピュラーなアイテムのひとつだが、紀元前 8-7 世紀において人気が増大すると、その他のアイテムにおいてもアニマル・ヘッドの先端飾りを付けたりアニマル・モチーフで装飾したものが一般的となった。アニマル・ヘッドの先端飾りを伴うブレスレットを始めとするオーナメントは古代世界のほぼ全域でポピュラーとなるが、極めてヘレニスティックなギリシャ・ジュエリーのトレード・マークとも言える存在である。

アナトリアの東北部では紀元前 9 世紀半ばに、またカスピ海と黒海の間の高原では紀元前 6 世紀初期に繁栄したウラルトゥ王国は版図にゴールド鉱山を有し、ゴールドスミスたちは美しい重量感のあるゴールドワークを生産した。カルミール・ブルールの宮殿では紀元前 7 世紀または 6 世紀初期に遡るライオン・ヘッドの先端飾りを伴うゴールド・ブレスレットが発見された。象徴的なアニマル・モチーフと結び付いたその正真正銘のシンプリシティは、その地域の典型的なものである。この“アニマル・スタイル”のジュエリーの大半の起源は北方の遊牧民族スキタイと結び付いたもので、紀元前 1000 年紀初期までにイラン北部で確立され、アケメネス朝時代 (紀元前 538-331 年) を通して衰えることなく継続した。

よりロマンティックだが起源があいまいな後年の秘匿財宝がオクサス・トレジャーである (ほとんどが大英博物館所蔵)。1877 年にオクサス川の近くで発見された大量のゴールドワーク (23) で、運搬中に山賊たちによる強奪にあったが取り戻されたものである。翼の生えたグリフィンの先端飾りの付いた象嵌によるゴールドのブレスレット 2 本を含むゴールド・ジュエリーと、数多くの素晴らしいトルク (首輪)、ライオンやガゼル、その他のアニマル・ヘッドのフォルムの先端飾りを伴う、掬るか畝を立てた棒状のブレスレットである。象嵌はターコイズや他の宝石によるもので、スキタイの作品を思わせるものである。同じく典型的なギリシャのシグネットのフォルムのリングもある。これらのジュエリーは紀元前 5 世紀から 4 世紀後期にわたるものである。ギリシャのゴールドワークとの様式的な関連がリングやアニマル・ヘッド付のトルクなどに容易に認められるが、技術か細部のいずれかにおいて本当のギリシャ製のものとは異なる。その他はアケメネス朝の最高のジュエリーに含まれるもので南ロシアやアフガニスタンで生産されたジュエリーとスタイル的に近い関係がある。こうした性格の秘匿物はアレキサンダー大王 (紀元前 336-323 年) の東征と時を同じくするものである。

エジプト化の影響は、象牙彫刻（24）といったアートにおいて非常に顕著であったごとく、ゴールドワークにおいても見られるもので、全体的な均一性は小アジアとレヴァント沿岸、ギリシャすら含めて、それらの地域で発見されるゴールド・ジュエリーに見ることができる。ビーディングを施したワイヤーなどのゴールドへの細工のこの地域への導入は、疑いの余地なくフェニキア人の貿易商人たちに帰するもので、彼らの地中海沿岸全域へのジュエリーのフォルムと技術の伝播における重要性はいかに評価してもしすぎることはない。同じく、エジプトから小アジアをも含んだペルシャ帝国内においては、職人たちの移動が相当にあった。ダリウス1世（治世：521-486 BC）がスーサに自らの宮廷を建設した時、その労働力としてエジプト人のゴールドスミスたちも動員されたが、彼らが素材としたゴールドはアナトリア西部とバクトリアからもたらされたものであった。

アレキサンダー大王の時代以降、近東のジュエリーはヘレニズム世界を通じて極めて均質なものとなり、この状態はもちろんいくつかの地域特性はあるもののローマ時代においてもほぼ同様であった。

ニ、エジプト

1. 青銅器時代、：紀元前 1000 年以前

(a) 早期王朝 (c. 2850 B.C. ～) ～古王国 (～c. 2050 B.C.)

エジプトが青銅器時代に入るのはメソポタミアより約1000年後の早期王朝(B.C. c. 2850～B.C. c. 2650) からだが、開闢を担った民族がメソポタミアにおけるシュメール人の場合と同様今なお定かではない上に、歴史上への突然の登場とファラオを頂点とする神聖政治の統治システムおよび他に例を見ない個性的なアート・スタイルを、ローマによるプトレマイオス朝征服までの 3000 年以上の長きにわたって保持し続けたという点で極めてユニークな文明とすることができる。そのエジプトでは最も初期の時代からジュエリーが着用され、紀元前 3000 年前後からゴールドと銅のオーナメントが製作されていたとされているが、その大半のものを特徴付けているのは色石の象嵌による目覚しい多色性 (25) である。

象嵌用の素材には様々なものが用いられており、ラピスラズリやターコイズといった宝石からファイアンスやガラスなどの人工素材にまで及んでいる。そのファイアンスは最初期の時代から登場するが、おそらくは銅の精錬技術と関連して発展したものである。

このようなエジプト人の色彩に富んだジュエリーに対する偏愛の結果として、エジプトで用いられた様々な宝石が古代世界における交易の最良の指標にすらなっている。かくして、ラピスラズリはアフガニスタンより運ばれ、ターコイズはシナイ半島の砂漠地帯からもたらされたが、不思議なことに、エジプトのジュエラーたちはプトレマイオス期 (紀元前 304-30 年) の時代に至るまでパールもダイヤモンドも知らなかった。人工の様々な素材 (近代のジュエラーたちには馬鹿にされた色付の釉やガラスも含む) を用いる一方、木材や骨、象牙、その他の有機的な素材も同じく用いられた。

エジプトの多色のジュエリーは、そのほぼすべてにおいて、たとえ宝石がセットされているにしても決してその宝石自体を珍重するためではなく、もうひとつ別の目的に供するためであった。図像に顔料を施すという目的 (26) のためである。それらの宝石はこまごまとカットされそれぞれのセッティングに収まるように研磨されたが、逆にセッティングの方は特定の宝石のために特別に製作されるということはなかった。ゴールドワークは、そしてそれに対応する宝石やガラスは、フォルムとプロポーションの厳密な基準に従って製作された。その他のアートの形態と同様にエジプトにおけるジュエリーは、一般的に言って、実験的な試みや自由な表現のためのメディアではなかったのである。

古王国時代初期のゴールドスミスたちはシート・ゴールドによる細工を修得して、中空の球状のビーズをシート・ゴールドで作るこれらのコンポーネントをロウ付けしたが、そうした中には驚くべき精密さを有するものもある。シート・ゴールドはハンマリングで打ち出しにされたり、ワイヤーに加工されるか正確な形状に切り出されたりした。それらのパーツは、花や動物などの自然のフォルムを再現するようにアセンブリされることもあった。この時代には技能的にかなりの高度化が見られ、表面のエンボス加工やチェイシングの精度も向上した。

発掘品に加えて壁画や彫像から察するに、この時代の男女は明らかに幅広のウェスク(カラー)とペアの幅広のブレスレットを好んだが、一般的にすべてビーズで作られたものであった。ペクトラル(胸飾り)のいくつかのフォルムは初期時代から時々着用されたのであろうが、それ以前には描かれておらず、イヤリングとリングは着用されていなかった。その他の装身具にはディアデムやベルトなどのヘッド・オーナメントが含まれる。

(b) 中王国 (c. 2050 B.C. ~) ~新王国 (~c. 1075 B.C.)

この時代のゴールドスミスたちは、エジプト起源のみならず近東全域の起源の最も目覚ましいジュエリーの多くを生み出した。ベースのゴールドの絵柄の部分彫り下げ、そこにぴったりと収まるようにカットしたカラード・ストーンを嵌め込むシャンルヴェ(彫り下げ)象嵌は新しい技法に取って代わられる。それが中王国のジュエラーたちが製作した最も特徴的なもの、クロワゾネ象嵌(27)のジュエリーである。ファイアンスと色石(典型的にコーネリアンとラピスラズリ、ターコイズ)が正確な形状に加工され、デザインにアウトラインを付けるシート・ゴールドのセルにセットされた。象嵌の精密さと微細さは多くのものが緊迫感と躍動感を生んでいるものの、全体としての効果ではシンメトリーが大きな役割を演じている。たとえば、ラフーンのプリンセス・シトハトールユネットの墓から出土した(センウスレト 2 世の)ペクトラル(ニューヨーク、メトロポリタン博物館)(28)の全体的なシンボリズムと首尾一貫性は、自ずと明らかなものである。それは向き合うファルコンのフォルムをしており、それらのファルコンの各頭の上に王の印のユリーアス(蛇形記章)を伴う太陽の円盤がある。各ファルコンは一方の爪で権力のシンボルを掴み、もう一方で何百万年を意味するヒエログリフのシンボルを支えている。2つのユリーアスから下がっているのはアंकのシンボル(生命を意味する)でユリーアスとアंकの間には、何百万年を意味するシンボルに支えられて、セソストリス 2 世(c.1844-c.1837 BC.)の名前がある。このデザイン全体は、創造の源である原初の水を表わすジグザグ・デザインを伴うベースの上に置かれている。プリンセス・シトハトールユネットの豊富なジュエリーの中にはアメネメス 3 世(c.1818-c. 1770 BC.)の名前を帯びたやや質の劣る同じようなペクトラルがある(カイロ、エジプト博物館)。両ペクトラルともに、表側にデザインの詳細を描いたチェイシングの図が見られる、エジプトのジュエリーにおける共通した特徴である。

このように、古代世界では際立って宝石を多用したエジプトではあるが、宝石自体を珍重するのとは異なり、顔料としてゴールドの表面を覆うことが目的であったために、紀元前 2000 年以降にメソポタミアから伝えられたグラニュレーションとアプライド・フィリグリーは、エジプト人にはあまりアピールしなかったようだが、その積極的な採用を妨げたのは技能不足ということではなかった。ただエジプト人たちは典型的な多色の象嵌を、その表現的なデザインとともに決してグラニュレーションあるいはアプライド・フィリグリーと組み合わせることはしなかった。同じことは新王国(c.1540-c. 1075 BC.)とそれに続

く時代のペクトラルやその他の多色のジュエリーについても言える。新たに導入されたグラニューレションの使用は、おそらく、伝統的な象嵌による“絵画のような”あらゆるクラスのジュエリーにマッチするとは考えられなかったのであろう。

ツタンカーメン (c. 1332-c. 1323 B.C.) のつとに有名な集合体としてのジュエリーの富と多様性は、彼の先行者たちの時代の伝存品の不足を補って余りある。大きなアイテム、ペクトラルやカラーなどは中王国時代のものと大差なく見えるかもしれないが、重要な違いが存在する。ツタンカーメンのジュエリーはごたごた感やくどさがほとんどなく、デザインとレイアウトの調和は厳密な図像的表現と同様に重要なものとなっている。シンメトリーは依然として重要だが、センター・モチーフもしくは図像が目立ってアシメトリーな場合にはこれは放棄された。ゴールドワークは大半が見事なもので、その数の多さから個々のデザイナーや職人の何人かはその特徴を同定することも可能となっている。

2. 第3 中間時代 (c. 1075 B.C. ~) ~ 後期王国 (715~332 B.C.)

第21 王朝 (c.1075-c. 950 BC) のファラオたちの墓から出土した壮麗なゴールドとカラード・ストーンジュエリー (主にエジプト博物館) は、全体的な壮麗さと技術的品質の双方において、中王国および新王国の最良のジュエリーにひけを取らないものである。本物の石への回帰も見られるが、特にラピスラズリやグリーン・フェルスパー、コーネリアンに顕著で、西アジアとの継続的な交易を示すものと考えられる。昔の素材の再使用の明らかな証拠もあり、シェシェンク 2 世のブレスレット (エジプト博物館) はメソポタミアのアッカド朝時代 (紀元前 2300 年頃) のラピスラズリによるシリンダー・シールが実際にセットされている。ファイアンスと色付ガラスも同じくいくつかのジュエリーに使用され、さらに新たにエナメルがエジプトのゴールドワークにおいて最初の登場を果たした。

ペクトラルのようにどちらかと言えば二次元的なジュエリーのスタンダードは高い水準であることが多い一方、最も魅力的なアイテムが見出されるのは三次元的なアイテムにおいてである。たとえば、バステト (ラーの娘で頭が猫の女神) とハトホル (29) といった神々のフォルムの、素晴らしいソリッド・ゴールドのペンダントに作られたアミュレットがある。これらは主に非常に精密なロスト・ワックスのキャストによるもので、しかるべき場所にチェイシングで施したいくつかの仕上げのディテールを伴っている。中には、キャストとシート・ゴールドによるコンポーネントの組み合わせによって、立体のピースが組み立てられたものもある。最も見事な実例はオソルコン 2 世 (c.929- c.914 B.C.) の時代からの三幅対のオーナメント (ルーヴル) で、うずくまるオシリスのフォルムをしたオソルコン像の両脇に立つラピスをちりばめた円柱の上にイシスと鷹の頭をしたホルス

(30) を配したものである。彫刻したアミュレット (一般的にラピスラズリ) とゴールドワークの組み合わせは、この時代の流行とも言える。職人たちの技能は彫刻した象嵌のジ

ジュエリーにおいても見ることができ、精密にカットされた石がブレスレットやリングの外回りの表面に象嵌された。

紀元前 525 年にペルシャに服属したエジプトはその後一時的に復活するが、再びペルシャに敗れ、紀元前 332 年に最終的にアレキサンダー大王のヘレニズム帝国に併合される。大王の死後はギリシャ人の君主を戴くプトレマイオス朝が興り、最後の女王クレオパトラ (B.C. 51-B.C.30) まで続くが、その時代は 3000 年にわたってアイデンティティを維持したかつてのエジプトではなくギリシャ化された (ヘレニズム) 時代であった。

そのアイデンティカルなエジプトは他に例のない多色性あふれるジュエリーを特徴として維持し続ける一方、スフィンクスやハヤブサ、ロータス、パピルス、ハエやスカラベ、女神ハトホルの頭像といった他の古代文明においても採用されるモチーフの源泉ともなった。最も影響を及ぼしたものはブルーの釉をかけた焼き物、ファイアンスのスカラベで、その半立体の裏側の平らな部分にシールを彫り込んでワイヤー・フープにマウントした回転するリングは、リングとして着用するには不向きであったメソポタミアのシリンダー・シールを駆逐してしまう。このようなスカラベがやがてカメオとインタリオへと発展するのであり、後のシールやシグネット・リングの起源ともなった。インタリオは独自のアートとして確立された後も、コンヴェックスという裏側が盛り上がったスカラベのようなフォルムを維持してきた。

またエジプト的モチーフのひとつであるゴールドのハエは、新王国(B.C. c. 1540- B.C. 1075) 時代にヒクソスの支配者たちを破った英雄たちに軍功としてファラオが贈ったものが端緒となった。アレキサンダー大王も採用したこの習慣はヘレニズムの最後のエジプト女王クレオパトラの時代まで継承され、寵臣にジュエリーを贈呈してその忠誠に報いるという習慣はナポレオンもこれに倣った。

巨大な富と権力を持つファラオの装身具として、さらに死後はミイラや棺を荘厳するために、現代に繋がるほぼすべてのアイテムがエジプトにおいて開発されたが、ブローチだけは例外である。衣服を留めるものとして考案されたフィビュラがその原型で、これはミケーネやエトルリアにおいて発展したアイテムである。

三、ギリシャ

一口にギリシャ文明と言っても、そのほぼ 3000 年にわたる歴史を担ったのは単一の民族ではない。まず、紀元前 3000 年頃にクレタ島を中心とするエーゲ海に興ったミノア文明（初期：3500～2050 B.C.、中期：～1600 B.C.）を担ったのは、小アジア系の民族であった。次いで紀元前 2000 年頃、ミノアとは別のヘラディック文明（～1550 B.C.）下のギリシャ本土へとドナウ地方から移住してきた、インド＝ヨーロッパ語族の東方方言群のアカイア人の一部がミノアの強い影響を受けて生んだのがミケーネ文明（1600～1100 B.C.）である。本土のミケーネに拠ったことからこの名称がある。さらに紀元前 1200 年頃に民族大移動が始まると、西方方言群に属すドーリア人が鉄器を携えて南下し先住のアカイア人によるミケーネ文明を破壊した。民族移動は紀元前 1000 年頃までに終了し、ギリシャ諸族はペロポネソス半島からエーゲ海諸島、小アジア西岸まで広く定住を遂げる。

ここに、独立した民族的文明いわゆるギリシャ文明開花の基礎が築かれたわけだが、それからのほぼ 5 世紀が古拙文化と呼ばれる時代で、続く古典文化は紀元前 5 世紀半ばに黄金期を迎える。都市国家の連合であったギリシャとその文明は、マケドニアのアレキサンダー大王による彼の帝国への併呑（紀元前 335 年）まで続いた。大王の世界帝国の産物としての文化をヘレニズムと言うが、ヘレニズムとはそもそもギリシャ文化と同義である。ヘレニズム時代はアレキサンダーが病死（紀元前 323 年）した後も、紀元前 146 年にギリシャおよびマケドニアがローマ（共和国）の属州になるまで続き、エジプト（プトレマイオス朝）を始め小アジアから北インドにまで及ぶ広大な東方世界では紀元後に至るまで文化的影響を保った。

このように長期にわたる時代と各時代を担う民族の違いによって、文化が育んだ精神やその形象は様々だが、それでもなおエジプトやオリエントとは一線を画すギリシャらしさというものが感じられることは事実である。本章では時系列に沿って、ミノア（クレタ）、ミケーネ、古代ギリシャ（古典文化）、ヘレニズムの順に、各時代におけるジュエリーの特徴を解説する。

1. クレタ・ミノア文明（c.3500～c.1400 B.C.）

前期ミノア（c.3500～c.2050 B.C.）から青銅器時代に属するが、金属の加工技術は高度な発達を見せ、青銅（ブロンズ）製の武器や道具、ジュエリー、彫ったシールなどが製造されていた。有名なクノッソス宮殿は、最初のもので紀元前 1900 年頃に建造されたとされ、文明の新たなレベルに達したことが推察される。ミノアとは、その宮殿の主であるミノス王に因んだ名称である。

ゴールドとシルバーは前期ミノア文明の初期から使用されたが、常にゴールドの方がシルバーより一般的であった。ミクロス島やメサラの古代墳墓から相当数のゴールド・ジュエリーが発見されている（ヘラクリオンの考古学博物館）。初期ミノアでは、素材はハードストーンのビーズに加えてシート・ゴールドおよびゴールド・フォイル（箔）、ゴールド・

ワイヤーが一般的となり、アイテムはディアデムやヘッドバンド、ヘア・ピン、ビーズ、ペンダント、装飾チェーン、アームレット、ブレスレット、リング、そしてドレスに縫い付ける装飾品に広がった。

ディアデムには叩き伸ばし形を切り出したシート・ゴールドにルプセによるドットで主として幾何学パターンの装飾が施されたが、中には人間や動物のモチーフを表現したものもあった。個別に作られたシート・ゴールドとワイヤーによる花や葉の形のペアピンは、ディアデムのエッジに付けられることもあった。ペンダントも同じように作られ、ループ・イン・ループのゴールド・チェーンから提げられた。ペンダントとビーズの中には他の素材、ブロンズやロック・クリスタルと組み合わせたものもある。後で抜き取れるウッドやレザーといった素材をゴールド・フォイルで覆って作られたブレスレットは、エンボスのパターンで装飾された。ドレスに縫い付ける装飾品は、やはりシート・ゴールドを用いたスターやストライプ、円盤、盛上げ装飾の形を取り、端に糸通し用の孔が開けられている。

エイジナで発見された中期ミノアを代表するエイジナ・トレジャー（大英博物館）は、クレタ人の職人によって製作されたものと思われる。この時期にクレタ人のゴールドワークの品質は相当なレベルに達し、フィリグリーやグラニュレーション、ルプセ、クロワゾネ象嵌などの新しい技法が発達を見た。

おそらく現存する最も見事なジュエリーの実例は、有名なマリッパ出土のゴールド・ペンダント（31）（ヘラクリオンの考古学博物館）で、複数の新しいゴールドワークの技法を組み合わせ、大いに芸術性を高めたものである。2匹のミツバチまたはスズメバチがグラニュレーションを施した、蜂の巣か花と思われるセンターの両サイドに紋章のような形で止まっているデザインで、腹部が接するセンターとエンボスのアウトラインを付けた翅から提げられた円盤には、元々は石が象嵌されていた。さらに全体の上部にはフィリグリーによる微小な球体の籠が中に動く小さなゴールド・ビーズを入れて冠されており、さらにその上にペンダントとして提げるためのループが付けられている。

2. ミケーネ文明（c.1600～c.1100 B.C.）

後期ミノアではジュエリーの発展は見られないものの、技術的水準は維持された。穀物の穂型のペンダント付きフープ・イヤリングは、マルベリー・イヤリングとして知られる新しい形状である。後期に初めて登場するレリーフを施したビーズは量産されたものだが、本土のミケーネに拠ったアカイア人による征服時代のジュエリー生産の局面を特徴付けるものである。元来はクレタのオリジナルであるにもかかわらず、これらのビーズはやがてギリシャ本土のレパトリーの一部となったことから、エナメルを施したリングと同様に、一般的にミケーネの産物と考えられている。

ミケーネで一般的とならなかったのはゴールドのシグネット・リングだが、ミノア人の宮殿の工房において製作されたそれらは最終的には王族とともに埋葬された。この時代にクレタで同じくポピュラーであったのはマルベリー・イヤリングの大型ヴァージョンで、

長さが 35 ミリのものまであった。

宝石彫刻のアートによるシールの伝統は初期ミノアに始まり、同時代のエジプトおよび小アジアの影響を受けて発展した。

一方ヘラディック文明初期のギリシャ本土のジュエリーは、ティリアティス・トレジャー（ベルリン考古学博物館）に代表される。ゴールドの他に、シルバーとの合金のエレクトラムによるものもあった。トロイのジュエリーの強い影響を見せるそれらは、多数のビーズをワイヤーのフープで同心円状に取り巻いたチェーンから楔形のペンダントを提げたネックレスや牡牛の頭部を付けたピン、樽型のビーズなどが代表例である。

1876 年にミケーネの王宮の発掘に成功したシュリーマンがアガメムノン王のものと信じた有名なゴールドのデスマスク（32）は紀元前 1500 年頃のもので、シート・ゴールドを打ち出しだけで細工したものだが表現力は見事の一語に尽きる。

中期以降はクレタの影響が高まるとともに、オーヴァルのクラウンに似たディアデムなどの輸入品も見られるようになる。ファセットを付けたワイヤーによるフープ・イヤリングはバルカンからの影響と考えられ、その他にもアナトリアやシリア、そしてミノアの要素が組み合わされて一種の折衷スタイルが生まれる。

末期はミノアのジュエリーの発展形で、実際にクレタのゴールドスミスによって製作された。ヘラディックからミケーネへの移行期の技法は、シート・ゴールドへのルプセやスタンピングあるいは型押し、フィリグリー、グラニューレーション、石かガラスの象嵌と高度かつ多岐にわたるが、何と言ってもエーゲ海地域における初のエナメルが開発が特筆される。

3. ギリシャ文明 (c.950~335 B.C.)

ギリシャ諸族の定住が終了する紀元前 1100 年頃からがギリシャ民族としての独自文化の時代となるが、紀元前 900 年頃から始まる幾何学様式の時代には西アジア地域との交流も再開し、当時名を馳せていたフェニキア人のゴールドスミスたちがクレタのクノッスやアテネ、コリントなどに移民として工房を構えジュエリー製作に従事した。彼らはミケーネ時代のテイストや技法を継承しており、それをギリシャ人の弟子たちに伝授したことから、約 5 世紀を経てミノア/ミケーネのジュエリーが復活を見た。

古拙期 (B.C.700 年頃~B.C.480 年頃) に入ると、最良のジュエリーはロードスやテラ、メロスなどのエーゲ海諸島や小アジアのエフェソスからもたらされる。ロードス製の最良の実例は、長方形のゴールド・プラークで、胸に差し渡したり、ヘッド・ドレスとして高い位置に着用された（大英博物館、ルーヴル）。スタンピングによるエンボス加工によるものが一般的だが、最良の例には巧みにグラニューレーションが施されている。オリエント趣味が色濃いテーマが好まれ、スフィンクスやライオンを従えた女神、ケンタウロス、“窓辺のアスタルテ”（フェニキア人の豊穡と生殖の女神で、エジプト人の鬘を着けた女性が手摺越しに窓外を眺めているフェニキアお馴染みのモチーフ）（33）、ミツバチの女神などで

ある。

ペルシャとの戦争に最終勝利（紀元前 450 年頃）して以降の古典期（BC480～BC323 年頃）の特徴は、ゴールドの供給が再開したことと、彫刻的なフォルムがあまり評価されず、フィリグリーが装飾的パターンに使用され、エナメルがよりポピュラーとなったことである。これに伴いグラニュレーションは稀になり、石やガラスの象嵌はさらに稀となった。しかし、古典期の末期頃、彫刻を施した宝石が初めてリングのベゼルに使用されたことが特筆される。

ヘレニズム時代（333～30B.C.）

アレキサンダー大王による征服（336-323BC）の結果として、ギリシャは逆にエジプトおよび西アジアの影響にさらされることとなった。ゴールドがふんだんに使用できるようになったことから、数多くの伝存物が発見されている。青銅器時代以来初めての豊富なゴールドはフィリップ 2 世（マケドニア王：359-336B.C.）による鉱山の開発も与ったが、捕獲したペルシャ人の財宝が流布したことが最大の要因であった。

紀元前 2 世紀初期までに旧来を受け継いできたジュエリーは、新たなフォルムを見せるようになり、装飾のシステムはたちまち大幅に変化してその後のほぼ 2 世紀間、その状態を保った。主要な革新は、新しい装飾モチーフと装飾のシステム、形状である。いわゆるヘラクレス・ノット（34）は初期に導入され、ローマ人たちの時代までジュエリーの装飾モチーフとして人気を保ったものである。その起源はおそらくエジプトで、2 千年期の初頭にアミュレットとして使用された。クレッセント（35）はもうひとつの輸入品で、西アジアからのものである。純粋なギリシャのモチーフ、エロスとナイキ（ニケ）（36）の像は最もポピュラーなもののひとつで、すべてのヘレニズム美術において見られるものだが、イヤリングやネックレスに組み込まれた。

最も重要な革新は、ギリシャのジュエリーの外観を変貌させるものとしての宝石や色付ガラスの象嵌による多色性（37）であった。カルセドニーやコーネリアン、そして特にインドからのガーネットが紀元前 330 年以降使用されるようになった。紀元前 2～1 世紀のものからはまた、エジプトからのエメラルドとアメシスト、紅海からの小粒なシード・パールも発見されている。

ゴールド製のリースは、ソリッドなフレームワークにシート・ゴールドの葉や花、そして石やガラスのベリーが付けられたもの、さらに豪華なフィリグリーやエナメルの装飾を施したものも同じく存在する。ギリシャ北部とロシア南部の紀元前 3-2 世紀の豪華な墓から発掘されたものは、小さなフィギュアをセットしガーネットを象嵌したヘラクレス・ノットで構成されたセンターピースを伴う。そのセンターピースからは、たくさんのガーネットや他の宝石をセットした非常に複雑なペンダントが吊り下げられたものもある（アテネ、ベナキ博物館）。

大量に発見されているこの時代のイヤリングは、アニマル・ヘッドまたは人間の頭像を

付けたフープ・イヤリング (38) で、紀元前 330 年頃のアケメネス朝ペルシャのジュエリーに由来するものだが、いくつかの地域ではローマ時代まで人気を保った。裕福なヘレニズム時代の女性がより好んだのはおそらくペンダント・イヤリングで、非常に多様なものが大量に発見されている。それらの基本的な要素は裏側に耳に引っ掛けるためのフックが付いた装飾円盤で、そこからは円錐かピラミッド、ミニチュアのアンフォーラ、あるいはエロスやナイキといった翼の生えた神や女神の像が掲げられたと思われる (大英博物館)。鳥やその他のフィギュアのペンダントの中には、ディップやペインティッドのエナメルを施した特別なものもある。

ネックレスはイヤリング同様に一般的であった。多くがストラップにフラスコや槍の穂先のペンダントを複数付けたもので、接合部はフィリグリーとエナメルの装飾で覆われていた。チェーンまたはビーズの連もポピュラーで、両先端にはフープ・イヤリングとマッチしたセットとなるアニマル・ヘッドがあしらわれた。

平均で 10 センチ近い大きさのあるメダイオンは裕福な階層によって着用されたもので、ヘッド・ドレスとして着用されるかペクトラルとして胸に飾られた。それらはハイ・レリーフになった女神の胸像を伴うセンターのラウンデル (39) と、ガーネットやフィリグリー、グラニュレーション、エナメルで豪華に装飾されたゴールドの装飾フレームから成っている (アテネ、ベナキおよび国立考古学博物館)。

ブレスレットでは主要な 3 つのタイプが用いられた。アニマル・ヘッドを伴うフープ型とコイル状になったヘビを表わしたもの (40)、そしてゴールドのサークレットから成り、複雑にゴールドワークを施してセンターにヘラクレス・ノットを配したものである。

リングもポピュラーであった。イングレイヴィングを施した円形ベゼルのリングは、紀元前 3 世紀まで続くが、後にはプレーンなものか装飾を施したフープにガーネットまたはアメシストのカボションまたは彫刻を施した宝石をセットしたもの、稀ではあるがカメオをセットしたものもあった。コイル状のスネーク・リングも同じくおそらくはブレスレットとコンビネーションにして着用された。

ゴールドの技術においてギリシャは新たなものを産み出したわけではないが、関連したエナメルの技法は、オリエントおよびエジプトで開発された色付ガラスやグレイズ (上薬) の延長線上にミノア文明において完成されたものである。また、紀元前 7 世紀末期にリディアから導入した貨幣経済のコイン作りを発展させたコイナージュ (メダル・アート) (41) は、ゴールド・ジュエリーの新たな分野を拓くものであった。さらに、エロスやニケといった神々の立体像やそれらと一体となったアトリビュート、オリーブや月桂樹のリースといったアイデンティカルなモチーフは、エジプト起源のヘラクレス・ノットや西アジア起源のクレセントとともにスキタイのアニマル・スタイルと融合してグレコ・スキティアン・スタイルとして昇華する一方、やがてアレキサンダー大王による帝国拡大とともに、世界的な広がりを持つヘレニズム文化の潮流を作るところとなった。

もうひとつ、ギリシャのジュエリー史への貢献として忘れてならないのは、古典期末期頃 (c.350B.C.) とされる宝石彫刻をベゼルにセットしたカメオやインタリオ・リングの考案 (42) である。天然のコランダムの研磨剤であるエメリの産出地を抱えるギリシャにおいて、宝石彫刻は格段の精度を獲得したことは想像に難くない。事実それは、アレキサンダーのヘレニズム帝国とともに世界的な人気を獲得するに至った。

四、古代ローマのジュエリー

神話上のローマ建国は紀元前 753 年だが、それよりより 150 年以上昔、紀元前 900 年頃にトスカナ地方西部に定住して文化活動を開始した民族があった。エトルリア人である。彼らはイタリア半島の他のラテン系とは異なる謎の民族で、当初はギリシャの強い影響下にあったがやがて独自のアート・スタイルを確立する。特に、エトルスカンとして知られるメタルワークは出色で、エトルリアがローマに併合される紀元前 250 年頃までローマのジュエリーは事実上エトルリア製であった。その洗練された技術の最たるものがグラニューレション (粒金細工) で、これが生まれた近東や発展させたギリシャのものを凌ぎ、史上最も高度なレベルに達したと認められている。最小 0.18 ミリと言われる微細なゴールドの粒をベースのゴールドに線または面状にロウ付けして装飾を施すもので、その技術の詳細は近年まで謎とされてきた。

1. エトルスカンのジュエリー

特徴的なデザインのアイテムとしては、鞆を模したバウレ型 (バウレット) イヤリングが挙げられる。エトルリア人の発明のブローチの元となった長衣を留めるフィビュラや、エトルスカン・オーラム (エトルリア人の黄金) として知られるアミュレット (護符) を収納して首からかけるペンダントの一種のブラもそのままローマに引き継がれ、裕福な氏族の子息が着用した。

また高度なグラニューレションの技法は民族衰亡とともに消滅してしまうが、オープンワーク・フィリグリーはローマに受け継がれ、西ローマ帝国末期に大規模に復活する。

2. ローマ共和国

ローマ初期の数世紀にわたる歴史の中で、ジュエリーは公的な認可を必要とする奢侈品のひとつであった。社会規範を定めた紀元前 5 世紀の十二表法は死者とともに埋葬してよいゴールドの量を制限しており、また紀元前 216 年のカンネーの戦いでの大敗を受けてカルタゴとの戦費調達のために成立したオッピアン法では、ローマの貴婦人一人が着用できるゴールド・ジュエリーの重量を 2 分の 1 オンス (約 1.6 グラム) と規定していた。このようにジュエリーは主に女性たちによって着用され、男性はリースやリングに限定され、しかも着用される主な機会は社会的な用向きや宗教上の儀式においてであった。

この時代のジュエリーの発掘品から判るのは、ローマ人がイタリア半島統一を終えた後地中海パワーへと拡大する紀元前 250 年から紀元前 27 年頃までは、基本的にはヘレニズム・ジュエリーを継承したということである。アレキサンドリアやアンティオキアといった先進都市が生産のセンターであったが、ギリシャがローマの属領アーケア（紀元前 146 年）となって以来、首都ローマ自体がジュエリー製作の主要なセンターとなった。数多くのゴールドスミスたちがギリシャ東部から移住してきていたからである。しかし、発掘品が伝える彼らの技巧は、たとえ熟練してはいても、ヘレニズム時代の地中海各地のゴールドスミスたちによって保たれていた高いスタンダードに明らかに及ばないものであった。

3. ローマ帝国

共和国時代の大半のジュエリーはブロンズ製であったが、帝政の始め（紀元前 27 年以降）までには基本的にゴールド製となり、昔の厳格さはすっかり忘れ去られた。カリギュラ帝（37-41）の妃ローリア・パウリナは、常に頭と髪、耳、首、腕、指にエメラルドとパールを着用していたと大プリニウスは『博物史』に記している。そして彼は、この奢侈な風習の端緒をポンペイウスの東方における数々の勝利（紀元前 1 世紀半ば）のためとした。それに伴う戦利品の数々が、贅沢のあらゆる作法をローマに紹介したのである。オリエントという言葉には真珠光沢という意味があり、さらに最高級の真珠そのものをも意味する。東方は正に輝かしい西方人憧れの土地、貴重で贅沢な産品をもたらす地であった。ローマ帝国が西から東へと関心を移していった所以である。

残存している帝政期のジュエリーは様々な時代にわたって異なっており、代表的なものとして一括りにするのは困難である。ただ、帝国発足初期のころまではギリシャの影響が色濃く、ゴールドスミスだけでなく宝石彫刻もギリシャ人が多く携わったと考えられる。初代皇帝アウグストゥス（27B.C.-14A.D.）は、古代で最も著名な宝石彫刻師であるギリシャ人のピュルゴテレスを重用したアレキサンダー大王に倣って、やはりギリシャ人のデイスコリデスを自らの宝石彫刻師とした。同時代のギリシャ人宝石彫刻師として知られるソロンも、アウグストゥス皇帝治下の時代が活動の全盛期と考えられている。

ポンペイとヘルクラネウムの遺跡で発見されたジュエリーは、1 世紀のローマの貴婦人のジュエリー・ボックスの中身について格好の参考資料を与えてくれた。その社会ではすでに、この種の奢侈品がゆきわたっていたことを推測させるものである。出土品のジュエリーには、色ガラスやエナメル、パールがゴールドに付随する素材として使われている。さらに後の時代になるとカラード・ストーンへの関心が増大し、ゴールドへの細工にあまり注意が払われなくなる。2 世紀以降は硬度の高い貴石が使用されるようになり、時にはリングにマウントされた未カットのダイヤモンドが見つかる。サファイアとアクアマリンはイヤリングとネックレスで、リングには稀である。

2 世紀のジュエリーはイギリスの複数の遺跡からの出土品が挙げられ、3 世紀は同じくイギリスと西フランスからのもの、さらに 4 世紀は帝国全土に及ぶが、1979 年にイギリ

スの建築現場で発見されたセットフォード・トレジャー（43）が特筆される。現在大英博物館に収蔵されている 22 点の宝石をセットしたゴールド・リングと 5 点のゴールド・ネックレス、4 点のゴールド・ブレスレット、1 点のゴールドのベルト・バックルだが、帝国内のどこかで製作された未使用のアイテムで、すべてがさるジュエラーのストックであったと考えられている。これらのアイテムが見せる後期ローマン・スタイルは、古典期の終焉からビザンティン時代へと受け継がれるスタイルである。

リングにセットされている石は、エメラルドとガーネット、アメシスト、カルセドニー、ジャスパー、オニキス、ガラスで、カボションにカットされるかシールとして彫り込まれている。馬上のキューピッドとマーキュリー、アンティオキアのチュケー（運命の女神、ローマ神話のフォルトゥナ）のインタリオである。またそれらのリングのショルダーには、イルカの頭像やキツツキを象った立体的なものやイングレイヴィングで装飾したものが含まれる。

西ローマ帝国による古典期の後期には、オプス・インテルラッシレ（44）と呼ばれるエトルリアから継承したオープンワーク・フィリグリーやシート・ゴールドを切り抜いてレースのような効果を追及した透かし細工が復活発展し、西ローマ帝国滅亡後も東ローマ帝国によって受け継がれた。これは特にブレスレットに向けた技術で、ビザンティン・ジュエリーにおいてさらに洗練されたものとなる。

新しい装飾技法として初めてニエロが登場（45）したのもこの時代である。そこれはかすかに光沢のある黒い金属硫化物で、ゴールドやシルバーのジュエリーに刻んだ窪みの中に圧接し研磨する技法である。

もうひとつ忘れてならないのは、インタリオやカメオのフレームとして考案され今なおポピュラーなローマン・セッティング（カメオやインタリオ用としてお馴染みの内側に傾斜したプレーンなフレーム）（46）である。当然ながらその背景には、宝石彫刻に対する高い評価がある。

このように、ポンペイの発掘品（47）やセットフォード・トレジャーの発見から判るように、ローマにおいてジュエリーは市民階級の間で一般化したといえる。支配者の証の神器や荘厳具から離れて、ジュエリーは真に身を飾るパーソナルなアートとなった。そうした意味でローマは古代ジュエリーの到達点であったと言える。しかしその高いスタンダードは、476 年の西ローマ滅亡によって栄光の都とともに灰燼に帰してしまった。